民俗学の立場から見る第15回ドイツ語圏日本研究者会議

クリスチャン　ゲーラット

ドイツ語圏日本研究者会議について

３年に１回ドイツ語圏日本研究学会(1)が開催するドイツ語圏日本研究者会議(2)は、ドイツ語圏において一番重要な日本研究に関わる学会と思われる。一般的な学会と異なり一つの学問にこだわらず、日本に関するあらゆる分野の研究が発表される。したがって、ドイツ語圏日本研究者会議で発表される研究は現在ドイツ語圏における日本研究の傾向、すなわち流行を投影したものと言える。よって、現在ドイツ語圏の研究者たちはどのような現象をどのようなアプローチで取り扱うのか、ドイツ語圏日本研究者会議の諸発表を調べれば明かになると考えられる。

本報告では、第15回ドイツ語圏日本研究者会議で発表された研究について、民俗学がドイツ語圏における日本学科ではどのような位置を占めているのかを考えてみたい。すなわち民俗学的な、あるいは民俗学に関わる研究テーマは扱われているのであろうか。その研究では、どのようなアプローチが取られているのであろうか。日本民俗学の論文や研究はヨーロッパで参照されたり引用したりされるのであろうか。これらについて整理し、それを踏まえて、ドイツ語圏と日本の間の学術交流と日本民俗学の研究成果がドイツ語圏で受け入れられるためにはどうすればよいかを考えてみたい。

チューリッヒでの第15回ドイツ語圏日本研究者会議

第15回ドイツ語圏日本研究者会議は2012年８月28日～30日、スイスのチューリッヒ大学で開催された(3)。参加人数は270人で、第14回ドイツ語圏日本研究者会議（2009年ドイツのマルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルクで開催、参加人数300人以上）と比べれば少ない。発表は15のセクション（Sektion)、８のパネル（Panel)、２のフォーラム（Forum）に分けられた。

セクションは研究分野に分けられ、それぞれ以下の設題があった。

民族学（Ethnologie）	東日本大震災以降の日本（Japan nach dem Erdbeben）
前近代史（Vormoderne Geschichte）	日本における幼年・青少年。近代までの幼青年期の概念と経験（Japanische Geschichten von Kindheit und Jugend. Konzeptionen und Erfahrungen der frühen Lebenszeitalter bis zum Anbruch der Moderne）
近現代史（Moderne Geschichte）	自然と環境（Natur und Umwelt）
情報科学（Informations-und Ressourcenwissenschaften）	日本学における辞典の理論・実際（Theorie und Praxis des Wörterbuchs in der Japanologie）
芸術史（Kunstgeschichte）	芸術史と……？（Kunstgeschichte und…?）
言語学（Linguistik）	メディア・言語・文化（Medien-Sprache-Kultur）
文学Ⅰ(LiteraturⅠ)	文献学の未来（Die Zukunft der Philologie）
文学Ⅱ(LiteraturⅡ)	日本文学における新しい概念？　国文学・正典・文芸理論（Neue Konzepte japanischer Literatur? Nationalliteratur, literarischer Kanon und die Literaturtheorie）
メディア（Medien）	日本におけるメディアの社会的潜在能力（Das gesellschaftspolitische Potential der Medien in Japan）
哲学と思想史（Philosophie und Geistesgeschichte）	人間性の限界（Grenzen des Menschlichen）
政治（Politik）	2009年以降の日本における政治的変遷（Politischer Wandel in Japan seit 2009）

宗教（Religion）	日本の諸宗教における「まもり」の意味（Bedeutung von “Schutz” in den japanischen Religionen）
社会（Soziologie）	激変する社会（Gesellschaft im Umbruch）
舞台芸術（Theater）	演劇空間（Theaterräume）
経済（Wirtschaft）	日本経済における権力（Macht in der japanischen Wirtschaft）

更に、8つのテーマによる学際パネルが催された。テーマは以下の通りである。

日本文学・映画における余暇と時間感覚（Muße und Zeitempfinden in Literatur und Film Japans）
日本と東アジアにおける国民国家の生成（Die Herausbildung des Nationalstaates in Japan und Ostasien）
外国語としての日本語（Japanisch als Fremdsprache）
中間階層以外―新しい生活事実への質的・論弁的 照察（Jenseits der Mittelschicht―Qualitative und diskursive Einblicke in neue Lebensrealitäten in Japan）
日本大衆文化におけるジェンダー（Japanische Populärkultur und Gender）
日本における男女共同参画社会基本法と平等政策―1999年～2011年という期間への批評眼（Das Partizipationsgesetz und die Gleichstellungspolitik in Japan. Eine kritische Bilanz der Jahre 1999-2011）
日本研究のインフラストラクチャー施設としてのベルリン州立図書館（Die Staatsbibliothek zu Berlin als Infrastruktureinrichtung für die japanbezogenen Wissenschaften）
比較される日本資本主義（Der japanische Kapitalismus im Vergleich）

加えて、テーマも方法も決まりがないフォーラム、いわゆる社会科学フォーラムと文化科学フォーラムがあった。そのフォーラムは、三年前ハレ・ヴィッテンベルクで初めて試みられたセクションのテーマ決定に対しての批判への反応でもあった。それまで、セクションで決まっていたのは研究分野のみであった。テーマを決定する理由は、セクションの発表をセクションごとの論文集としてまとめしやすくしたり、発表後のディスカッションを容易にしたりすることにあった。

しかし、ドイツ語圏日本研究者会議の役割は全ての日本研究のためのフォーラムであるべきにもかかわらず、今までのセクション設定では特異な

研究テーマは排除されがちであるという批判が唱えられた。そのような視点から見れば、現代のフォーマットは折り合いのついたものであるといえるであろう。こうして、以前の会議と比べて各セクションへの参加資格が緩やかになり、自分の研究分野が多少異なっても、研究目的に合うテーマのセクションで発表する研究者が増えてきたようである。

第15回ドイツ語圏日本研究者会議における日本民俗学

ドイツ語は日本語のように、民俗学（Volkskunde）と民族学（Völkerkunde または Ethnologie）という区別がある。日本民俗学に一番近いセクションに Ethnologie の名がつけられたことは、何か意味ありげに思われる。比較的に新しい命名法である可能性があり、ドイツ語圏の一番大きな日本研究辞典である『Japan-Handbuch』の1991年にあらわされた第３版では、民俗学には Volkskunde という題名があてられていた。

現在のドイツ語圏の日本研究者では、「民俗学」としての Volkskunde 的な研究は非常に稀である。しかし、それは必ずしも民俗学的研究、または民俗学的なテーマを扱う研究が存在しないとう意味ではない。存在はするが、別の名を名乗って、別の研究分野で発表されることが多い。例えば、筆者はその安産祈願に関する研究を宗教というセクションに出した。

更に「民俗学者」として自称する研究者は少ない。その一人はヴィーン大学の Johannes Wilhelm である(4)。漁業の民俗学の専門家であり、日本民俗学会や東北民俗の会などのメンバーでもある。第15回ドイツ語圏日本研究者会議では、幾つかの複数の発表を行っている。

民俗学に関わる発表の一覧

セクション：民族学

マックス・プランク社会人類学研究所の Christoph Brumann(5)が担当した「民族学（Ethnologie）」というセクションのテーマは東日本大震災の影

響に関するものであった。論文募集では、「文化人類学やその隣接分野からの投稿は特に歓迎するが、社会科・人文科のあらゆる観点を含めた学際的なアプローチを目指している」という言い方が使われた。歴史的なことより時事を対象とすることは、ドイツ語圏における「民俗学」的研究の特徴の一つであるといえるかもしれない。第15回ドイツ語圏日本研究者会議においては、民俗学的現象を歴史からアプローチする研究者が宗教や前近代史のセクションに入ることが多かった。

東京のドイツ日本研究所(6)のSusanne Klien(7)は震災の影響を受けた地方で活躍している諸ボランティア団体を対象とする研究を紹介した。発表の中心はその活動ではなく、20歳～40歳のボランティアの目的、個人的な背景、経験などについてであった。参与観察、それにボランティア、NGOと行政官庁の代表者、地元の避難者へのインタビューを踏まえた研究であった。

マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルクのCornelia Reiherは福島第一原子力発電所事故以降の日本における食品消費を扱った。特に西日本における食習慣や食品消費は原子力発電所事故の影響を受けて、どのように変化したかという問題を研究の中心にした。東北の産物は避けられるか、それとも避難者との共同精神の印として重点的に購入されるか、日本人は政府の公式有害物質計量を信頼しているか、市民団体やNGOはどのような役割を果たすかなどの研究目的はフィールドワークのみならず、特にインターネットアンケート調査を踏まえて調べられた。インターネットアンケート調査やメール調査でデータを集めることは、直接フィールドワークを行いにくいヨーロッパの研究者達にとって近年に重要な調査方法になったといえる。

前述のJohannes Wilhelmは複数の発表を行い、その一つは民族学セクションでの三陸の漁業の再建をテーマとした。Wilhelm氏は荒廃している漁港の統括、津波による漁具の破壊、海産物への需要の変化等に対する漁民の反応、再建の原価計算、地方・県の中・長期的再建計画などを扱った。

「祭りで頑張ろう」をタイトルとした発表ではテュービンゲン大学のWolfgang Fanderl(8)が、東北地方の祭を研究の中心にした。しかし、彼の

興味を引いたのはその祭の内容や形ではなく、被災経験を乗り越えて再建に向かう人々に対する祭りの役割であった。Fanderl 氏によれば、祭りはアイデンティティを構成し、祭りやその計画に参加することは共同精神をあらわす行為でもあるという。

デュッセルドルフ大学の Christian Tagsold[9] も東京のドイツ日本研究所の Maren Godzik[10] も、大震災が東北の高齢者の生活へ与えた影響を発表のテーマとした。Tagsold 氏は岩手県でのフィールドワークを踏まえて、老人ホーム、老人医療施設などを経営する NGO が震災直後どんな難問を解かなければならなかったかを研究した。他方において Godzik 氏は、そのような施設に頼らずに自主的に生活する老人のことも研究のテーマとした。その老人は震災によって家を失ったのみならず、彼が長年かけて作り上げた社会関係も大変な影響をうけた。特にそうした老人達の欲求を復興でどう考慮すべきかという問題を扱った。

広島大学の Ulrike Wöhr[11] はジェンダースタディーズ、またはフェミニズムのアプローチをとって、ジェンダーは反核運動でどんな役割を果たすかを考えた。特に女性と女親の反核団体での役割りと、母親として子どもが育てられる環境に対する責任を強調するストラテジーが Wöhr 氏の関心を引いた。民族学・民俗学的研究と言えるかどうかは不明であるが、確かに民族学セクションのアプローチの多様性の証の一つである。

セクション：宗教

宗教というセクションは、マールブルク大学の Katja Triplett[12] が担当した。テーマは「日本の諸宗教における「まもり」の意味」であった。ここでは歴史学的研究が多く、現在に関わる研究はほとんどなかった。

このセクションも Wilhelm 氏の発表があり、テーマはアンバ様信仰であった。Wilhelm 氏はその信仰の由来と普及、それにその内容の歴史的な変遷を説明した。第15回ドイツ語圏日本研究者会議はにおいて、彼の発表のみが狭い意味で「民俗学」と言えると思われる。彼は山口弥一郎、桜田勝徳、和田文夫等の論文を引用し、日本民俗学による研究成果に論及した。

Wilhelm 氏の発表と違って狭い意味で民俗学ではなかったが、民俗学にも関連性があったのは早稲田大学の Niels Gülberg[13]の発表であった。非常に多くの収集成果を踏まえて、仏教のお札のことを紹介した。彼の扱う問題はお札の作製、使い方と仏教の接客態度としての役割等であった。Gülberg はお札の収集についての情報を、インターネットにも載せている[14]。

セクション：前近代史

前近代史というセクションにおけるハンブルク大学の Eike Großmann の発表は、宗教や信仰は歴史学的研究として、しかも常民ではなく貴族や上層階級を中心に扱われる傾向の一例と思われる。発表のテーマは平安時代の出産儀礼であり、寛弘５年（1008年）後一条天皇（諱：敦成）の誕生が例として上げられた。Großmann 氏は研究を小右記や御産部類記等を踏まえて行った。

民俗学に関連性があった発表としては、ベルリン自由大学の青少年文化研究者として活躍してる Felix Milkereit にも言及すべきであろう。そのテーマは江戸時代の青少年文化、とくに傾奇者や若者と現代の青少年文化とを比較するものであった。

パネル：社会の中間層

社会の中間層という学際パネルの二つの発表は民俗学でもよく扱われる婚姻の実践を中心としており、民俗学にも関連性がある。その一つはジュッセルドルフ大学の Nora Kottmann[15]によるもので一人の話者（男性、37歳）の経験を例として結婚年齢上昇などの現在的傾向について論じた。

同じデュッセルドルフ大学の Annette Schad-Seifert[16]はそれより幅広いアプローチを取り、一人の話者にこだわらず、日本の家族構造の変化や未婚化社会、特にマスコミや大衆のそれに対する反応を説明した。

社会科学フォーラム

社会科学フォーラムの発表は民俗学とはほとんど関連性がないものであっ

たが、ハイデルベルク大学のBjörn-Ole Kamm[17]の発表には言及すべきと思われる。そのテーマは民族誌学におけるインターネットの潜在力であった。日本に関する研究を行う研究者の中には、インタネットによる調査でデータを集める人々も増えており、日本におけるインターネットそのものを研究のテーマとすることも多くなっている。Kamm氏の発表はそのような研究の可能性と問題点を取り上げた。

民俗学の立場から見れば

15回ドイツ語圏日本研究者会議の諸発表を見れば、日本民俗学はドイツ語圏、いわゆるヨーロッパでほとんど受容されていないことは明らかである。明示的に民俗学者と自称したり、日本民俗学の研究成果を参考にしたりする研究者の数も少ない。しかし、民俗学に関連性がある研究は、ドイツ語圏でもしばしば行われている。

日本民俗学がその研究に重要な寄与をする可能性があるはずなのにあまり受容されていない理由はいくつかあると思われるが、言語障壁、つまり資料がヨーロッパにおいて当地の諸言語で紹介されていないことは確実にその一つと言えよう。

注

（1） http://www.gjf.de/japanese/index.htm

（2） http://japanologentag.org/japanese/index.htm

（3） http://www.zuerich.japanologentag.org/

（4） ホームページ：http://www.wilhelm.jp

（5） http://www.eth.mpg.de/cms/en/people/d/brumann/index.html

（6） http://www.dijtokyo.org/?lang=ja

（7） http://www.dijtokyo.org/about_us/susanne_klien

（8） http://www.uni-tuebingen.de/fakultaeten/philosophische-fakultaet/fachbereiche/aoi/japanologie/mitarbeiter/wolfgang-fanderl.htm

（9） http://www.phil-fak.uni-duesseldorf.de/modernes-japan/personal/pd-dr-christian-

tagsold

http://ch-t.de/tagsold-englisch.html

(10) http://www.dijtokyo.org/about_us/maren_godzik

(11) http://intl.hiroshima-cu.ac.jp/modules/intl/point/teacher/woehr.html

(12) http://www.uni-marburg.de/fb03/ivk/religionswissenschaft/personalia/triplett

(13) http://www.f.waseda.jp/guelberg/profile.htm

(14) http://www.f.waseda.jp/guelberg/zuerich2012/japotag.htm

(15) http://www.phil-fak.uni-duesseldorf.de/modernes-japan/personal/nora-kottmann-m-a/

(16) http://www.phil-fak.uni-duesseldorf.de/modernes-japan/personal/prof-dr-annette-schad-seifert/

(17) http://www.asia-europe.uni-heidelberg.de/de/personen/person/persdetail/kamm.html